

# 未来は 見えますか

岡山・子どもと貧困

岡山県南の住宅街にある民家。日が落ちるころ、制服姿の男子中高生4人が次々と集まってきた。「お帰り」。3人の住民ボランティアが笑顔で迎え入れる。

経済的に厳しい家庭の子どもたちに食事を提供するため、住民有志の一般社団法人が運営している「居場所」。メンバーが所有する建物を平日午後7時まで開放している。

7人で食卓を囲んでいると、中学2年の浩斗君(14)「仮名」が「おかわりある?」。遠慮があるのだらうか。そっと茶わんを差し出した。「少なめ……やっぱり普通にして」。育ち盛りの食欲が勝り、2杯目を勢いよくかき込んで

だ。

1日当たり4、5人、多い日は10人前後が訪れる。ほぼ毎日来ている高校3年の雅哉君(18)「同」は当初、周囲との関係をうまく築けなかった。

お菓子を独り占めし、缶詰を勝手に持ち帰ることもあったが、「ひとり親家庭で、朝と昼は食べていないようだ」と聞いていたボランティアたちは温かく見守った。雅哉君は頬が膨らみながら戻ると、態度が和らぎ、問題行動もなくなったという。

「家で満足な食事ができず、給食が命綱になっていた子どもがいる」。法人理事の時江さん(68)「同」は2年ほど前、知人の言葉に衝撃を受けた。

関係者に聞くと、地元中学校では生徒の約3割が就学援助を利用して、家計が厳しいために学用品代や給食費などに公的補助を受け、岡山県平均(2013年度で16・8%)のほぼ2倍に当たる。スーパーでは子どもによる

総菜の万引が後を絶たないことも知った。

隣り合わせにある貧困の現実。「支えが必要な子どもたちを放っておけない」との思いが時江さんを動かした。子育て支援に携わる住民らと昨年8月、公民館でカレーを振る舞う支援を始めた。さらに継続的な活動を目指して協力を募り、「居場所」を開設したのは今年3月のことだ。

自分たちの手はどこまで届いているのだろうか。時江さんたちには手応えの一方、シレンマも少なくない。

19年度までに年間延べ50万人分の整備を目指し、16年度予算概算要求に自治体への補助事業費を盛り込んでいる。

時江さんたちの試みは、そんな政府の先を行く。地域に根差し、身近な子どもたちに目を凝らしていたからこそ、いち早い支援につながられた。

金銭的な不安もある。行政の委託や補助を受けているわけではなく、運営は法人メンバーの会費や寄付が頼り。ボランティアが食事代として300円負担し、近隣住民らから米や野菜をもらっているものの、ぎりの運営が続く。

政府は8月、子どもの貧困対策として、犯罪から守り、食事を提供するのための「居場所」づくり推進を打

自分たちの手はどこまで届いているのだろうか。時江さんたちには手応えの一方、シレンマも少なくない。

「国や自治体、地域、学校が一体となって子どもを守らなければならない。いずれは本格的に学習を支援したり、福祉機関につないだりする役割も担ってほしい」。理事たちはさらに先を見据える。

## ボランティアが夕食提供

### ① 居場所



「居場所」で夕食のハンバーグを用意する住民ボランティア。「せてこては、おなかいっぱい食べてほしい」

「居場所」を訪れているのは、友達同士の口コミで知ることができた子ども、ボランティアが情報を得られた子どもに限られているのが現状だ。プライバシーの壁は厚く、支援を必要とする子どもとの接点を見いだすのは難しい。

中学校にも相談してみたが、慎重な答えだった。校長は「学校として家庭の経済状況にまで踏み込み

政府の大綱は貧困の世代間連鎖解消を掲げ、16年度予算編成では新たな対策が検討されている。自治体や民間も手だてを模索する。

厳しい境遇の子どもを自立に導くには、何が必要なのか。最終の第3部は支援の現場をレポートする。